

## 第2回平塚市新文化振興指針策定検討専門委員会の概要

日 時：平成21年10月29日（木） 15：00～17：00

場 所：平塚市民センター大会議室

出席者：小中山委員長、平野副委員長、石川委員、岩崎委員、大野委員、土井委員、中野委員、森委員

（事務局）関本市民部長、増田文化・交流課長、阿部文化交流課課長代理、小菅主管

欠席者：石井委員

### 【次第】

- 1 開会
- 2 委員会傍聴者入室について
- 3 議題
  - (1) 議事録について
  - (2) 平塚市市民文化基本構想の実施状況について
  - (3) (仮称) 平塚市新文化振興指針について
- 4 その他
- 5 閉会

### 【議事録】

- 1 議事録について
  - 委員長：このことについて、先ず事務局から説明をお願いしたい。
  - 事務局：[資料説明]  
議事録の修正あり。  
薪能の開催の件で「八幡神社」から「平塚八幡宮」に修正する。その開催時期を「12月」から「8月」に修正する。また議事録を要約した形で公開することを了承される。
- 2 平塚市市民文化基本構想の実施状況について
  - 事務局：[資料説明]
  - 委員長：ただ今の説明に対して意見や質問があれば出していただきたい。
  - 委員：紅谷町まちかど広場事業の中で、皆さんのお心に止めておいていただきたいことがある。外国籍の市民がワールドフェアを自主的に開催している。これまでに年1回で、3回開催されている。今年度は3月にも実施する予定である。ブラジル、ペルー、ボリビア、中国、カンボジア、フィリピン、シンガポール、ロシアそして日本代表として、ローレンスに行った人が「ヒコーキ雲の会」というグループをつくって、8～9カ国の人たちで開催している。
  - 委員：国際交流に関して、具体的にどのようなことを行っているのか。また「みどり基金」で、木や野鳥を守るという施策はどのようなになっているのか。
  - 事務局：「みどり基金」は、市民の貴重な樹木を保全し、緑化の推進を図るために設置しているが、市の木「くすのき」や市の鳥「しらさぎ」をどのような方針で守っているのかは承知していない。

国際交流の具体例としては、平成2年にローレンス市と姉妹都市締結をしており、5年ごとの節目に相互公式訪問を行っている。来年度は姉妹都市締結20年を迎え、相互訪問の内容を検討している。また、例年、青少年海外交流事業を実施しており、青少年の派遣受け入れをしている。その他、ローレンスの関係では、神奈川大学がカンザス州立大学と学生交流をしている。ローレンスの交流圏以外にも、平塚市内に外国籍市民の方が4,900人程おり、多文化共生ということで、日本語教室を5教室開催するなどしている。

委員： 国際交流で日本語教室を5教室と紹介していただいたが、現在7教室あり、小学校、市民活動センター、中央公民館等で実施している。その他にA E C C、湘南J R Cでの講座も別途ある。

その他に日本語指導ボランティアのスタッフが減っていくため、国際交流協会から補助金をもらって、ボランティア養成講座を隔年で開催している。参加者は30人弱で、これまで15回開催している。

委員長： イベントとして考えるなら、カンザス大学はバスケットボールが強く、去年は全米一になったはずである。アメフトのチームを招くのは大変だが、バスケットであれば人数も少なくてもよいし、東海大学と交流試合をしたり、市民を対象とした教室等を開くこともできるのではないか。

また新規事業の提案となってしまうかもしれないが、ソウル市では、街角に「情報ポスト」というデジタル端末を置いて、イベントやまちの案内等の情報を得ることができるようになっている。このようなものが平塚市にもあれば、市民だけでなく、来訪者にも利用してもらえるのではないか。ソウルではものすごく活用されている。

委員： 外国籍市民の支援として、FM湘南ナパサで火曜日の夜7～8時に、ポルトガル語、スペイン語、中国語、タガログ語、英語、日本語で生活情報を発信しているので、是非、聞いてほしい。

委員長： 「公共施設に文化性を導入」とあるが、具体的にどのようなことか教えてほしい。

事務局： かつて長洲知事が公共施設の文化化を提唱して、本市でも桜ヶ丘ポンプ場や旭小学校校舎の壁面にレリーフを描いたことは承知している。こうしたことは今も継承されていると思うが、具体例を挙げるほど詳しくは承知していない。

副委員長： 平塚市文化振興基金で、美術品購入という話があったが、これまでにどれくらい使われているのか。

事務局： 平成17年に500万円ほどの指定寄付があり、市の財源と合わせて、美術品の購入を行った。現在も指定寄付で2,200万円ほどあり、これについても美術品購入に使用される予定である。指定寄付の場合は、一旦は基金に組み込まれて使用されている。

### 3 (仮称) 平塚市新文化振興指針について

事務局： [資料説明]

委員長： 事務局から本日の会議で、「基本理念」について意見をいただきたいという話があった。それと密接に関連する「ひらつか文化」「基本目標」「アーティストという言葉の使用」についても併せて、ご意見をいただきたいと思うがどうか。

委員： 「ひらつか文化」という言葉はよいと思う。

現行の基本構想の理念にある「パートナーシップ」「未来への」という言葉は、人によって解釈が異なると思うが、どのような意味か。

事務局 : 「パートナーシップ」は市民と行政との協働、「未来への視点を持った」というのは、言葉のとおり、次を目指していくということで承知している。基本構想を策定した当時の平塚市の文化は、近隣の都市と比べて、決して突出したものではなかったため、次へのステップアップを目指して市民文化を作っていこうという意味でつくられたものと思う。基本理念のひとつとして「パートナーシップ」はこの指針の中では、協働や市民力として表現をしている。

委員 : 市民みんなで協力してやっていくことと未来を見据えてとりかかろうという解釈なのですね。

最初に「人づくり」ということは同感である。前回の委員会で須賀地区の子どもたちを巻き込んだお祭りについて意見があったが、子どものころから地域の祭りや文化への参画意識を育てることはとても重要なことである。良い意味での町内会ごとの競争意識が大切で、そのようなことを市全体に広げるようなことをもう少し明確に書かれてもよいのではないかと思う。

委員 : 基本目標2「アーティストの支援」は私にとってとてもうれしいことである。前市長の時代に、若い有望なアーティストを発掘することを目的に公開オーディションを行ったことがある。多くの参加があり、何人かの優秀な人を選んで年末に演奏会を行った。そうすることにより、若いアーティストを知ってもらい、大勢の市民に楽しく聞いていただくことができたと思っている。

今日も中学校で演奏会を実施したが、若い地元のアーティストを発掘して登録すれば、わざわざ東京から呼ばなくても、良いコンサートを開催することができると思う。こうしたオーディションが2年か3年に1度でもあれば、市内に住んでいる優秀な人材を発掘し、平塚で活動の場を与えることもできる。こうしたオーディションは、1度だけで続かなかった。決して多くの費用が必要なわけではないし、若い人にも大きな関心事だと思う。音楽だけでなく、美術でも、演劇でも公募をして、選ばれた人が発表できる機会を提供すればよいのではないか。プロのアーティストもやる気になる機会を作ってほしい。さらに姉妹都市交流の一環として、アーティストが訪問して公演することも可能だと思う。

委員長 : 「ひらつかアーティスト」という言葉を使ってもよいのではないか。

委員 : 今お話ししたオーディションは、「平塚に関連がある人」を対象に行ったため、多くの人が集まったが、市内在住にすると対象が限られてしまうのではないか。

委員 : 「ひらつか文化」とは何をイメージしているのか。

例えば、“上方文化”といえば食文化、“江戸文化”といえば町人が作りだした文化をイメージすることができる。

5つの基本目標で「ひらつか文化」は何をイメージしているのか、一体何なのかが出てくるものがないと、単に文字と文化をつけただけであると感じる。組み合わせたような言葉が世の中に氾濫していると思う。例えば、「●●学」等は何をイメージしているのかわからないし、もっと具体的にイメージできるものがあったらよいように思う。

委員 : 私は「ひらつか文化」を逆説的に考えてもよいと思う。これまで「ひらつか文化」をイメージするものがなかったということは、まち全体に集まるエネルギーを吸収できるものがなかったということだと思っている。地域限定でイメージできる、あるいはエネルギーを集めるという文化はあるはずである。

そのような文化の核となるものがないところに、核となる文化を創造する心意気、またきっかけを市民が参画して、また市が提供するものであると思う。

人を引き付ける歴史や伝統がある地域では人々はそこに戻りたがる。良い悪いは別にして、平塚には強烈なインパクトのある伝統や文化がないため、いろいろなイメージの解釈ができる。これから「ひらつか文化」の担い手を生み、育むという創造する余地があることで「ひらつか文化」として言葉を逆説的に考えてもよいと思う。文化は心に据えるものであるという面で、真空地帯に何か生まれるような期待を込めた名称として「ひらつか文化」ととらえれば、詭弁かもしれないが「ひらつか文化とは何かわからない」という答えになるのではないか。

委員 : 旧横浜ゴム平塚製造所記念館は4月から開館して、115団体に登録してもらい、利用者が15,000人を超えた。施設が各団体の利用にふさわしいのか疑問に思うが、音楽の活動団体の利用が一番多い。建物のイメージと音響の良さが評価されていると考える一方で、記念館以外に活動できる場所がないのかとも感じている。指針で掲げている基本目標1～3に対応するためには、まずはきちんとしたものを作らなければ、文化は育たないと思う。

例えば、新文化センターなどは、練習するための大規模な場所ではなく、小さな場所がたくさんあればよいという要望も多く出てくると思う。

「ひらつか文化」に関しては、それをイメージできるものをうたい上げてよいのではないか。それを実現するための方策を考えていけばよいと思う。

委員 : 現行の基本構想では「平塚市民文化の創造」とあるが、この案では「ひらつか文化」となっている。「市民」を抜いた表現になっているが、施策がどのように変わったのかを説明してほしい。

基本構想では、「基盤づくり」「人づくり」の順であったが、今回の指針で、先ず「人づくり」を掲げた理由は何か。

事務局 : この指針案は、現基本構想の引き継いでいる。文化の担い手を市民、事業所、団体、NPO等としているが、この指針では市民に限らず、平塚を舞台に活動している人を含めて考えている。また、「ひらつか文化」は、市民の文化活動だけでなく、自然や歴史などを含めて考えている。

ぼんやりした部分は確かにあるので、いろんな意見をいただきたいと思っている。

「市民」をとったということは特に意識してのものではなく、指針案の内容を積み上げていく中で「ひらつか文化」という表現になった。

委員長 : 文化とは様々なものを含んでいるが、「市民」を入れると人に限定されてしまうように感じる。

委員 : 前回の基本構想で「平塚市民文化の創造」となっていたものを、新しいものが入ったために「ひらつか文化」にするという理由を知りたい。

事務局 : 基本構想と比べて特に大きな違いはないが、変更点として基本目標のトップに「人づくり」を持ってきたことである。人が活動してはじまり、それが結果として大きなものが作られると考えている。もちろん基本構想の理念でもこの考え方はあるが、活動する人をどのように盛り上げていくか、活動する人のステップアップするための仕組みづくりではないかということで「人づくり」をトップに持っている。

「場づくり」は、ハード面だけでなく、交流する機会等も想定している。場づくりは活動したい人に対して、わかりやすく、参加しようという環境づくりでもあるとの考えから、この指針案は人づくりからはじまるように視点を変えたということである。

委員長 : 行政の立場として、総花的で薄く、広くということは理解できるが、もう少し集中と選択にシフトするという意見だと思う。

指針のポイントが「人づくり」であるならば、基本理念を「人が輝く」としてはどうか。

委員 : 「創造する」つまり、これから作っていかうという姿勢に賛成する。  
外国籍の市民を対象とする活動では、「平塚市に住んでよかった」という言葉を聞きたくて活動している。

「ひらつか文化」もそのようなことから創造するのではないかと思っており、「ひらつか文化」ということに賛成である。

委員 : 基本理念は案で「市民力・地域力あふれるひらつか文化の創造」と「ひとが輝く彩豊かな文化実感都市ひらつか」をミックスしたものであればよいと思う。「市民力・地域力」という言葉は既に総合計画でも使用されている。

委員 : 「人が輝く、ひらつか文化を創造する」というのは、夢があって、素晴らしいと思う。

委員 : 平塚の文化振興をイメージできる言葉がよいのかなと思う。

委員長 : 未来に向けて戦略的に、みんなが納得するビジョンを作っていくことが大切だ。文化振興の核になる、ひらつか固有の文化の核をつくるビジョンを持った指針が望ましいと考えている。

委員 : 「ひらつか●●文化」と●●の部分に、音や色を入れることができれば、イメージできそうな気がする。

副委員長 : 文化は創造だと思う。

岐阜県高山市の例として、一宮という場所に「臥龍桜」があり、桜の季節に合わせて「臥龍桜日本画絵画展」が開催されるが、市内からだけの参加かと思ったら、全国から応募があるとのことであった。種の一粒、一粒を大切に育て、育てる。決めつけしないで、創造する文化でよいと思う。そうした意味から「輝く」「薫る」「託す」のような表現がよいと思う。

委員 : 歴史ある地域のものとは平塚の文化を比較しても仕方がない。まずは一歩から新しいものを始めて続けることが大事である。ソフト面でやれることをやっていき、今後、ハード面の整備を是非実施してほしい。平塚で始めて、行政がバックアップして広めて、膨らませていくことができるのではないかと。基本理念に「人が輝く」という言葉が入ることは私自身気に入っている。

委員長 : 核になるような小さなものを一つ一つ積み重ねていく、拾い上げる戦略が考えられるとよいと考える。

委員 : 湘南平塚能狂言を実施した発端は、シテ、能面師、狂言師が平塚出身だったり、住んでいたり、人材がいたからである。地方都市としてこれだけの人材を抱えていることがわかり、これをきっかけに実施し、それが続いている。こうしたきっかけから、眠っていたものが引き出されたのではないかと。

真空地帯があるがゆえに、内なるエネルギーがある。それを引き出すことを誰かが行えば、エネルギーが集まり、その時に市がサポートすればよいと思う。

平塚出身者をキーワードに人材を集めて、身近な場所で、生のものを体感できる場所を提供し、見た人が感動できるし、感じることができる。体感する機会を身近な場所で提供することが、文化を生み出す環境を育むことであると思う。

能狂言はすでに10年近く続いている。

委員長 : 各委員の意見を集約すると、基本理念には「ひらつか文化の創造」や「“人”を前面に出す」ということである。アーティストの表現については、異論もなく、これでいこうという意見であった。また、核になる平塚固有の文化を創造していくため

に、その仕組みや戦略を考えていくとの意見が主旨であった。

どのようにうまく、情報の発信・収集を行い、一つ一つを集めて、平塚全体に浸透する仕組みをつくるかが大切である。

「ロングテール・・・スモールワールド」と、小さなところを積み上げて、点が線になり、線が面になっていくような「仕組み」がうまく作ればよい。

#### 4 その他

事務局 : 財団法人平塚市文化財団の合併が検討されていることを報告